

## 総務教育環境委員会行政視察報告書

現地視察における調査結果について、下記のとおり報告します。

令和8年1月14日

光市議会議長 森戸 芳史 様

### 総務教育環境委員会

委員長 河村 龍男

副委員長 藤川 みゆき

委員 仲小路 悦男

委員 中村 譲

委員 中本 和行

委員 仲山 哲男

委員 林 節子

委員 森戸 芳史 (議長)

委員 早稲田 真弓

随 行 山本 大輔

### 記

- 1 視察年月日 令和7年5月19日 (月)
- 2 視察場所 周南東部環境施設組合 リサイクルセンター えこぱーく
- 3 視察調査結果 別紙のとおり

## 総務教育環境委員会行政視察調査結果

日 時	令和7年5月19日（月）11:00～12:00
市町村名	光市
テーマ	不燃ごみの分別等の現状について
視察場所	周南東部環境施設組合 リサイクルセンター えこぱーく
応対者	周南東部環境施設組合 荒川事務長 向井係長



### 1 視察概要

#### (1) 施設概要

周南東部環境施設組合が運営する「リサイクルセンター えこぱーく」では、光市と下松市の家庭から出る不燃ごみのうち、リサイクルできる不燃ごみの処理を行っている。具体的には、容器・包装用プラスチック類（黄色の指定袋）、その他プラスチック類（青色の指定袋）、びん・缶類、金属類、ペットボトル、小型家電製品（緑色の指定袋）、有害ごみ（指定なしの半透明袋）で、これらの不燃ごみを適正に処理することで、リサイクルによる再資源化と埋立処分場の延命化を図っている。

なお、リサイクルできない不燃ごみ、具体的には、陶磁器、ガラス、ゴム類（赤色の指定袋）は同施設隣接の「後畑不燃物埋立処理場」で処分している。



## (2) 施設見学

えこぱーくに搬入された不燃ごみは、資源として利用できるよう委託業者が手作業で選別を行っているが、毎年、容器・包装用プラスチック類（黄色の指定袋）の組成調査（ごみ質検査）を実施している。地区ごとに100袋を無作為抽出して調査しており、光市全体の適正品率は約85%で、その他プラスチック類（青色の指定袋）の混入が多くなっている。



搬入された不燃ごみの選別は手作業で行っているため、刃物やライターなどの危険物が混入していると大変危険であり、機械の故障や火災につながる可能性がある。こうした場合は作業を停止し、ごみを搬入することができなくなり、市民がごみを出せなくなる状況も起こり得る。実際に、正しく分別されなかったことが要因となり、令和6年9月に施設初の爆発事故が発生し、爆発による爆風で扉が破損する事態となった。幸いにもけが人は出なかったが、原因は可燃性ガスが残ったままのごみがおもひプラスチック類として捨てられ、処理工程で破碎している際に漏れたガスに引火し、爆発したと推測されている（原因と思われるものが爆発で粉々になったため、断定ではなく推測）。分別作業の安全性確保や施設の安定的運営のためにも、ごみを捨てる際の正しい分別が非常に重要である。



## (3) 不燃ごみ分別体験

施設見学後、容器・包装用プラスチック類（黄色の指定袋）の分別作業の体験を行った。汚れたままのごみや、中身が残ったものがそのまま捨てられるなど、きちんと洗われていないものがあつた。本来、洗っても簡単に汚れが取れない場合は、可燃ごみで出すものである。また、個別の袋に入れた状態で捨てられたごみもあり、中に何が入っているか分からないため危険であり、中袋を割く手間もかかるため作業効率が低下することとなった。正しい分別がされていないことで、事故などの危険性や、リサイクル率の低下によるごみ処理費用の増加、埋め立て処分量の増加による埋立処分場の延命化阻害

につながるため、改めて分別作業の大変さと正しく分別することの大切さを身をもって実感することができた。



## 各委員の所感

### 河村 龍男

本日は総務教育環境委員会協議会を現地の周南東部環境施設組合をお借りして協議会の後、リサイクルセンターえこぱーくの行政視察を実施。組合より不燃ごみの搬入状況や地区別のごみの組成状況の説明を受け現地の選別のコンベアでの仕分け状況を見学し、最後に容器包装リサイクルの黄色の袋からごみを抽出して、現場での仕分け作業を体験。普段、何気なく容器包装リサイクルの黄色の袋へ投入しているごみの中へいろいろなごみが混入し、普段の思い込みでごみ出しをしていた状況が少し理解できたような気がしました。汚れた袋、透明な袋、分別の難しい状況が少しできたような気がしました。また、リサイクルセンターの手選別ラインでの手作業の大変な状況が理解できましたので、今後の分別作業を悉皆したいと思います。

### 藤川 みゆき

私にとって初めての視察であった「えこぱーく」は、想像を超える規模に圧倒された。プラットホームでは性質ごとに分別された不燃ごみがラインに流され、手選別室では異物や、汚れたごみを職員が手作業で除去していた。大音量と悪臭の中、黙々と作業する姿に頭が下がる思いだった。説明では、刃物や注射針などの混入により大きな危険が伴うことも知った。実際にプラごみを選別した体験では、約3割が不適切に出されており、ごみを出す側の配慮も重要だと感じた。今後は今回学んだことを地域や子どもたちに伝え、意識の向上とごみ削減につなげていきたい。

### 仲小路 悦男

ごみの分別については、現在の体制をすぐに変更することは困難であり、当面は継続せ

ざるを得ない状況です。そうであるなら、誰かが決められた通りの分別を行わなければなりません。家庭で100%できればいいのですが、これができていないというのが、大きな課題です。そうなれば、次は、ごみ置き場を管理している自治会ですが、実際に作業するのは、自治会員のどなたかであり、どうしても限られた人に大きな負担がかかってきます。そして、最終の砦がえこぱ一くです。今回、視察をして、手作業で大量の分別をされていて、感謝と尊敬の念を抱かずにはおれませんでした。この作業をどうしたら減らせるかを、真剣に考えなければなりません。市民一人一人の意識をどう高めるかが重要です。そのための具体的な支援が必要です。総合計画等にも醸成との表現が多く使われていますが、一人の心を動かすのは大変な労力を要しますが、ここに一切の焦点があると思います。

## **中村 譲**

光市えこぱ一くを視察し、環境保全とそれに対するごみの分別という市民参加が融合した、先進的な取り組みに感銘を受けました。ごみの分別作業の現場では手作業での分別をされており、本来入れてはいけない物がまだまだたくさん入っているということがわかりました。わたくしたちも分別作業を体験させていただきましたが、一袋でも色々と仕分けをするのは大変な作業でした。しっかりとした分別は、一人一人が気を付けていかなければいけないことだと思いました。今後も市民と連携し、えこぱ一くの価値をさらに高めていくために、積極的な政策提案を行っていきたいと考えています。

## **中本 和行**

今回は、久しぶりにリサイクルセンター「えこぱ一く」処理現場を視察してたくさんのごみ分別作業は大変だと実感しました。入口から出口までの一連の流れが効果的に機能している。

ごみの資源化、減量化に向けて行政・市民が一体となり取り組まなければなりません。ごみ問題は、避けては通れない大きな課題です。

高齢化社会になり困っている高齢者等のごみ出しが困難で支援に積極的に対応できるように取組が喫緊の課題と考える。

## **仲山 哲男**

改めて今回、間近で見学し、その作業を目の当たりにし、困難さ・大変さを感じた。特に容器プラのラインには余裕がないように感じられた。

最終埋立処分場への埋め立てごみを極力減らし延命を図る上で、リサイクル率の向上に努めねばならないことを考えると、現在の施設の分別処理能力では、市民の分別の適正化は必須と強く感じた。市民の分別努力へのモチベーションのためには、何のために分別が必要なのか、また、排出時の分別の努力がどのように役立っているか周知のため、見える化することが重要だと思えた。

一方、高齢化が進むなか、ごみ出しの分別の適正化が、より困難になってくることを考えると、分別の簡略化や、出しやすいごみ集積場所の設定など、一朝一夕に改善しにくい難しい課題があり、我々市議会としても、各地の事例や新しい技術を研究し、改善への糸口となる指摘・提言をおこなっていくことが、求められていると思う。

## 林 節子

えこぱーくでは、家庭などから搬入された不燃ごみから手作業や機械によって資源を選別するリサイクルを行っている。ごみを捨てる際、洗って乾かし、指定ごみ袋に入れる。ビニールの中にごみを入れ指定ごみ袋に入れるなどはしない（2重袋）。正しく分別するなどのルールがある。

今回、不燃ごみ（黄色）の分別を体験。黄色い「包装プラ」トレーやラベルビニール、ボトルなどがある。ごみの袋を開けてみるとビニール袋が中に入っており、さらにその中から、洗っていない食品トレーや弁当容器が入っていた。他にも指定袋とは違うごみが入っていた。臭いもきつかった。その後、分別が見学できる場所で、ガラスなどがベルトコンベアに乗せられ、分別を進めていく様子を視察した。

この視察で、ごみを正しく分別をすることや、ごみの出し方のルールを守って回収してもらうことが、いかに大切かを実感した。ごみは捨てれば終わりではない事を再度、周知していくことが重要である。

## 森戸 芳史

周南東部環境施設組合の後畑不燃物処理場は昭和58年から運用を開始し、これまでに第1期～3期と建設され、1期は平成4年に満杯、現在、2期と3期を併用しているが令和28年までは使用できる見込みである。平成25年度から埋立地の延命を図るため、「再処理引き取り業務」を開始。埋立処分されたプラスチック類を掘り起こし、サーマルリサイクル用として年間約800tを目標に搬出。再処理引き取り業務を実施しているとはいえ埋立処分場の延命化が大きな課題で、新たな埋立処分場を選定する場合、多大な時間を要することが想定される。今回のような見学や分別体験をしてもらうことでごみ減量につながると考える。引き続き積極的な市民への周知を行ってほしい。また製品等の製造者に対し、リサイクルしやすい製品開発を求めていく必要がある。

## 早稲田 真弓

施設見学では、まず大きな音と臭いに驚いた。長時間この環境で作業を行うのは労働環境として厳しさを感じた。次に、不燃ごみのうち黄色のごみ袋の分別作業の現場でも臭いの中、立ち仕事による手選別作業で異物チェック等を行っており大変だと感じた。また、分別された異物の現物を見て、市民の方への分別の徹底の必要性を改めて認識した。分別体験では、黄色のごみ袋の中に汚れた包装用プラごみが多く見受けられた。また、青

色と黄色のごみ袋のどちらなのか、実際自分自身でも迷うものがあり、分別困難な現状を体験を通して理解を深めることができた。

視察を通して、ごみの仕分け作業の安全・衛生のさらなる充実や生産性向上を図るための検討が必要であり、同時に市民の方へのさらなる分別の徹底の重要性を認識した。

今後のごみ分別の課題と向き合い、また高齢化に伴うゴミ回収の課題についても対策を引き続き検討していこうと思う。